

抗日戦期の作家生活保障運動

杉 本 達 夫

一

八年にわたる抗日戦争の間に、中國經濟は壊滅的な打撃を受け、民衆の生活は根底から破壊された。文藝界の人びとの場合、その活動が實業から最も遠いところにあつて、經濟の崩壊による打撃は特に大きかった。戦場に赴いて銃弾に身をさらし、あるいは都市で日軍機の爆撃に追われるという、直接的、軍事的な危険もさることながら、食なく住なく衣なく、病んで藥なき生活の危機が、それに劣らず生命を脅かしていた。本稿では抗戦文學運動のない手たちの經濟問題、いわば作家たちの胃袋の問題を、國民黨支配地區についてごく一端ながらのぞいて見ようと思う。

文協（中華全國文藝界抗敵協會の略稱。以下略稱を使う）が行な

った運動の中に、作家の生活保障の運動および困窮作家や遺族への救援運動があり、後者は抗日戦勝利後に文協が改稱した中華全國文藝協會（同じく「文協」と略稱するが、本稿では對象としない）にまで引繼がれた。

兵糧なしで戦さはできぬ道理で、文藝戦線における戦士も腹を滿たさなくては活動できない。文藝戦士の収入は第一に稿料あるいは印税であるべきであり、そのためには書籍雑誌が相應に出版されていて、正常に報酬が支拂われなくてはならない。だが近代の文化活動を支えてきた大都市を次つぎと失ってゆく時期に、當然ながらそれは望むべくもなかった。作家も出版家も移動で落着かず、印刷所もあるいは移動し、あるいは爆撃で破壊された。南京陥落のあと、中央政府の重慶移轉に伴って武漢が文化活動の中心になり、多くの作家が

集まって、一九三八年三月には文協が結成されるのであるが、中心地たりえた時期は短く、同年夏にはすでに機關も企業も組織も次の場所（主として重慶）への移轉準備を始めていた。國統區で比較的腰を落着けて活動できるようになったのは重慶移轉以後のことである。重慶のほか桂林、昆明、貴陽、成都、さらには香港に知識人が多く集まったが、中心はやはり重慶で、文協の總會（全國本部）もずっとここにあった。もともと、重慶は中心地であつたといえたえず爆撃を受け、冬の濃霧の季節のみようやく安心して動けるという状態であつて、市街の破壊と危険のため、作家たちも近郊に疎開せざるを得ず、活動が著しく制約されていた。

抗日戦期に國統區で發刊された新聞雑誌は數多い。『中國現代文學期刊目録』（上海文藝出版社、一九六一年）に記された文藝雑誌だけを見ても、少くとも八十數種、詩誌、戯曲誌等を含めれば少くとも一四〇餘種ある。香港を含めれば數はさらに増えるのであつて、數量だけを見ればいかにも多いのであるが、しかしそのほとんどは短命に終つた。いわゆる三號雑誌が半ばを占めるのである。（「孤島」上海でも九〇餘種が數えられるが、こちらは短命度がいっそう大きいようである）。ましてその發行部數、流通範圍の狭さを考えれば、と

うてい利益と結びつく事業ではなかつた。武漢時代の「大公報」などは、移住してきた作家の生活を氣づかつて稿料も奮發し、經濟的にも便宜をはかつたというが、それは個別の例であり、ひろく文藝界全體をうるおすことは到底不可能であつた。それどころか、インフレの進行につれて出版經費も日々高騰し、出版家側では稿料や印税を抑制することによって經費の節減をはかつた。經費高騰を理由にまったく拂わぬところさえあつた。著作権などはしばしば無視された。經濟から來る文化への壓迫が作家にしわ寄せされ、出版家にいよいよ道義を忘れさせたのである。

文筆一本による生活は平時においてさえ成立ち難いのに、非常時となればなおさら難しく、しかも他に生活の資を求めることがいっそう容易ではなかつた。収入の點からいへば、政府機關に入るとか教職につくとかした場合は、まだしも安定していたといえよう。新聞の文藝副刊や文藝誌の編集を擔當した場合は、不安定とはいへ、また報酬が僅かであつても、とにかく文藝の領域の仕事であり、文藝を通じて抗戰事業に參畫しうるのであつて、それなりの充實感を得られたであらう。だがそのいづれにも屬さぬ場合、事態は深刻である。貧窮はやがて病を呼び、多くの作家の生命を蝕んでゆく

のである。個人の活動であれ團體の活動であれ、文藝活動を妨げる要因はいくつもある。中でも諸法規できびしく出版事業を拘束し、言論統制をはかる政治の壓力は第一の要因であるが、作家の糧道を攻める貧窮という壓力も大きな要因であった。文藝界の統一戦線組織たる文協も、臺所事情となる暗澹たるものであった。

二

戦争の長期化とともに物價はうなぎ登りに高騰していった。ここにインフレーションの進行を示すいくつかの數字がある。表一に示すのは全國小賣物價指數の推移である。

表一は全國各地の指數を單純平均した數字である。廣大な國土がいくつもの經濟圏に分離しているため、物價は地方差が甚だしく、地方ごとの指數を見れば、暮らしにくさの度合がかなり違っていたことが推定される。

表二は地方差を示す數示である。ここに掲げた數字はいずれも政府機關の手による統計である。統計がどれだけ正確に實情をとらえているか、混亂の時代であるから計りがたいし、また政府の統計が民衆の生活實態とかけ離れていることは當然考えておかなければならないが、物價の急騰のすさま

戰時全國小賣物價分類指數

1937年1～6月を100とする。

	總指數	食物類	衣服類	燃料類	雜項類
1937年	103	101	107	105	105
1938	130	115	156	138	140
1939	213	175	295	220	243
1940	503	416	725	538	532
1941	1,294	1,168	1,718	1,241	1,249
1942	4,027	3,072	6,023	4,080	4,242
1943	14,041	9,582	25,539	14,050	14,330
1944	48,781	35,639	90,200	51,945	52,572
1945	190,723	158,780	299,323	241,521	184,455

〔譚熙鴻編『十年來之中國經濟』（中華書局，1948年刊）による（2）。〕

じさだけは十分に見て取ることができる。一九三九ころから指數は急上昇し、四二年以降は狂騰としか言いようがない。

表二

全国各地小賣物價指數

1937年1～6月を100とする。

	重 慶	成 都	康 定	西 安	蘭 州	昆 明	貴 陽
1937年	102	103	107	104	105	—	100
1938	122	125	153	142	140	—	105
1939	203	214	243	221	204	—	191
1940	548	615	690	417	373	—	448
1941	1,467	1,735	1,644	1,135	965	—	1,029
1942	4,248	4,720	5,539	3,994	2,592	—	3,711
1943	13,337	16,416	18,925	16,136	8,693	—	11,088
1944	45,840	66,351	62,830	10,305	25,241	74,232	25,546
1945	177,647	214,353	92,708	157,167	96,198	345,912	239,181

〔表一に同じ〕

その急上昇に轉じた時期の指數を表三で見よう。
指數ばかりではイメージを結びにくい。具體的な生活必需

表三

卸賣物價指數

1937年6月を100とする。

	重 慶	昆 明	桂 林	梧 州	西 安	蘭 州
.....
1939年6月	211.8	303.0	185.5	146.6	177.1	203.2
7	221.2	366.1	193.5	150.5	284.0	216.5
8	244.1	432.2	207.1	163.3	276.8	214.9
9	275.3	442.0	222.1	176.2	298.4	235.6
10	298.7	462.5	234.3	188.4	312.3	252.6
11	318.6	536.4	243.1	196.5	318.0	276.1
12	334.7	534.2	262.3	217.5	321.0	275.8
1940年1月	349.1	585.9	287.1	240.6	341.5	314.9
2	370.3	664.3	330.7	262.9	369.6	349.6
3	410.0	756.9	354.4	280.7	370.2	345.6
4	460.0	845.2	398.8	323.6	380.2	348.7
5	496.2	899.7	428.0	368.2	379.9	359.1
6	539.9	890.2	434.7	355.7	410.2	399.0

〔飯田藤次『重慶インフレーション研究』（日本評論社，
昭和18年刊）p.162～165より節録（3）。〕

表四

	單 位	1937年	1938年	1939年	1940年	1941年 6 月
		元	元	元	元	元
中 等 山 米	市 斗	1.253	1.203	1.297	7.067	41.87
黃 豆	市 斗	0.895	0.824	1.433	4.461	18.67
自流井花鹽	市 斤	0.132	0.142	0.162	0.402	1.21
五 花 猪 肉	市 斤	0.264	0.261	0.384	1.043	3.10
連 漕 煙 煤	百市斤	0.563	1.298	2.654	4.994	8.75
土 布	市 尺	0.112	0.181	0.371	1.048	1.67
草 紙	刀40張	0.040	0.040	0.063	0.201	0.60

〔上海日本大使館特別調査班編『戦時支那經濟統計彙編』第2輯「重慶各種物價統計集」(1943年刊)p. 82. 「重慶各項商品平均小賣價格表」より節録(4)〕

品について價格の動きを見てみよう。表四は重慶市におけるいくつかの品目の小賣價格の推移である。

ここに掲げたのはごく一部の品目である。生活を営むからには家賃もかかる。醫藥も石けんも要る。散髪もし、時には人力車も利用しなければならぬ。家族もちとなれば、出費はいよいよかさむ。こうした經濟情勢のなかで、實利の才を缺き生活力に乏しい作家たちの窮迫は看過しえぬまでになった。その日の糧を求めて奔走すれば、當然文筆活動が制限され、よい作品が生まれなくなる。文協という組織にとつても事態は深刻であった。文協には極端に活動費がなかった。専従といえるのは梅林ひとり。口ばかり多くて手がなく、さらには資金がなかったから、さまざまに活動プランはあつても、實施に移せるのは一部分にすぎなかった。それはすなわち、前線の將兵や後方の民衆により多くの作品を提供し、より多くの奉仕をすることで成立つ文藝戦士が、存在の基盤をゆるがされることを意味するのである。

三

文藝界では切實な危機感をもって事態を見つめ、文協を中心に作家の生活防衛の運動を始めるのであるが、そのきつ

けとなった事件のひとつに葉紫の死があった。葉紫（一九一〇—一九三九）は中共黨員でもと左翼作家連盟の一員。上海時代から極端な貧困と病苦（肺結核）の中で作家活動を續けていたが、抗日戦が始まって後、湖南省益陽縣の故郷に歸つて、農村でいっそうの貧困に苦しみつつ創作を續け、一九三九年夏に病狀が悪化して、十月五日に短い生涯を終えた。その後まもなく、残された妻湯味蘭が桂林在住の夫の友人鄭達芳にあてた手紙がひろく紹介されて、文藝界の友人たちの涙をさそった。手紙にいう。

「先生、葉紫は……自分にもう望みがないと知って、わたしの手を取り、はげしく泣きながら申しました。人ひとりが死ぬのはどうということではない。わたしが死んでも精神は死なないのだから。けれども氣がかりな事がいっぱいだ。子供たちは年端もゆかず、わたしが死ねばお前も子供も餓死にしてみようだろうし、長篇小説はまだ書いていないし、おまけに友人たちはみんなわたしの全快を待ち受けているんだよ」と。先生、葉紫はそのあと、いっそう悲しげに『友人たちよ、早くわたしを助けてくれ、子供たちを助けてくれ』と叫び、わたしに友人の皆さまに手紙を書いて、何とか暮らしをお救いください、あの世にあつても永遠に感謝を忘れません

抗日戦期の作家生活保障運動（杉本）

から、と伝えるよう申しました。ああ先生、わたしは胸を切りさかれる思いです。何とかなしいことでしょう。子供たちは毎日父親を呼び續けております。わたしは何度か自殺を思いました。でも子供たちは年端もゆかず、よくよく考えましたが、この上わたしが死んだら、あの子たちは誰に頼るというのでしょうか。わたしは罪がいっそう深くなるではありませんか。それに葉紫の葬いを出してくれる人もなく、わたしにもどうしてよいかわからず、お金もありません。……先生、この手紙が着きましたなら、葉紫が死んで子供たちが残されているので、友人の皆さままでお救い下さるようにと、どうぞ新聞でお呼びかけ下さいませんか。……」

葉紫は病臥中、一個一分の鶏卵ひとつさえ買えなかったという。そんな貧窮の中で、身寄りもなく、幼児をかかえてとり残された妻の心中は、何ともいたましい。一〇月一日深夜に書かれたこの手紙は二三日に桂林に着き、『救亡日報』に掲載されたと思われる。次いで文協の機關誌『抗戦文藝』第五卷第四・五期（一九四〇年一月二〇日號）の「文藝簡報」欄に轉載された。『救亡日報』は上海、廣州を経て桂林で復刊した新聞で、郭沫若が名義上の社長、夏衍が總編集長、桂林が編集主任をつとめて、地下共產黨員が中核をなし、實質的

には共產黨機關紙の性格をもっていた。『救亡日報』に集う友人たちはただちに葉紫の遺族への救援募金を呼びかけた。夏衍、艾蕪、新波、周立波、廖沫沙、鄺達芳、林林、楊剛、黃苗子、戴望舒、樓適夷等、計一五名を發起人とする呼びかけ「爲援助葉紫先生遺族募捐啓事」は『文藝陣地』（第四卷第三期）、香港『大公報』副刊「文藝」（第三四三期）、上海の『文藝新聞』（第六號。未見）にも掲載され、義捐金は『救亡日報』社にとどけられた。他に江西上饒の『前線日報』副刊「戰地」や福建永安の『聯合周報』も、葬儀と遺兒養育のための募金を呼びかけたという。⁽⁵⁾

葉紫の死は多くの作家にとって他人事ではなかった。明日は我が身となりかねないのである。文藝界の人びとは才能ある青年作家の夭逝を惜しむとともに、かれの死を民族解放事業に殉じたものと理解し、かつまた、中國の政治經濟狀況がもたらした必然の運命と受止めたのであった。重慶の文協總會は作家の生活保障運動を開始し、世論を喚起していった。具體的には原稿料の引上げと印税の保障を聲高く訴えたのである。『抗戰文藝』誌上ではまず姚蓬子と孔羅荪が論陣をはり、『新蜀報』副刊「蜀道」では作家二六人が出席して座談會を開き、重慶『大公報』の「星期專論」欄では老舍が訴え

た。文協地方分會でも呼應して運動を始め、たとえば昆明では雷石榆が編集する『雲南日報』副刊を舞臺にさかに支持を訴えている。⁽⁶⁾ 姚蓬子は文協の理事であり出版部主任であつて、機關誌『抗戰文藝』の責任者である。孔羅荪はこのとき新たに雜誌『文學月報』（一九四〇年一月一日、讀書出版社より創刊）の編集人となつていたが、武漢時代以來『抗戰文藝』の編集部の一員であり、この時もまだその任に當つていた。機關誌の編集當事者が個人名で發言した形であるが、その主張は文協會員の多くの見解を代表するものと見てよい。

姚蓬子は「爭取作家的生活保障——紀念葉紫先生和李希達先生——」（『抗戰文藝』第五卷第四・五期。一九四〇年一月二〇日刊）の中で、作家の困窮が作家の罪ではないにもかかわらず、客觀的には精神戰線における戦力の激減という罪をもたらししている苦衷をまず述べ、次いでいう。

「だが非難は次つぎとやってきた。すぐれた作品が生まれていない、千篇一律の抗戰八股だ、藝術水準が戦前よりいっそう低い、と。陰に陽に皮肉の矢が作家に向けて放たれ、あたかも火事に乘じて物を奪い、國難に乘じて財をなす良心喪失の不とどき者が作家であると言わんばかりなのだ。かと思えばもうひとつ、さらに惡い手口があつて、作家の責任を

天まで持上げ、作品の効力を砲火よりも大きく言いたてるのである。あたかも抗日戦の成否がすべて作家の筆にかかり、今日なお最後の勝利が訪れないのは作家が責任を果たしていない証明であると言わんばかりなのだ」

社會のどの方面からの聲にせよ、これだけ重い責任を押しつけられ、大きな要求をつきつけられるからには、それに應じうるだけの物質的條件が作家に與えられなくてはなるまい。これらの聲がいかに無責任な放言の類だとしても、惡條件のなかで少しでも貢獻しようと苦闘している文藝界のひとには、ずっしりこたえる放言であり、いっそう焦燥をかきたてる放言なのである。姚はさらに續けて言う。

「だが作家の方から反問したい。(同じ戦士でも)三等兵でさえ七元五角の國難手當を受取っているのに、今日の精神戦士の生活保障はどこにあるのかと。かりに作品を戦争に必要な商品だと見なすとしても、その物質的原價を計算すれば、どれほどの額に達していることか。インクは一瓶七、八元にあり、原稿用紙は百枚四、五元になり、ましてペンとなると一本一、二〇元で買えるものではない。……」おまけに物を書こうとすれば、いかに粗末でも部屋ひとつ、机ひとつ椅子ひとつなくてはならず、一日二度の粗食も缺かせない。そ

抗日戦期の作家生活保障運動(杉本)

れに對する報酬はといえば、千字三元なら破格であつて、どうかすると千字五角の例さえある。いっぽう重慶における印刷所の植字工の手間は千字につき三元五角から五元につく。

植字は専門技術を要する仕事ではあるが、頭腦を絞つて文字をつづるよりはるかに易しかろう。文章自體の價値が植字質に及ばないという不合理があつてよいのか、作家を餓死に追いこむ現狀に甘んじていられるのか、と姚は問ひかけるのである。(なお後述する孔羅荪「提高稿費運動」によれば、

一部には製作費高騰を理由に稿料を無料にしていた雑誌もあったが、一般に稿料は千字二、三元、まれに千字五元をこえる所があつた。開戦前でも『申報』や『文學』等は千字四、五元を支拂つており、したがつてこの時の稿料水準は開戦前とはとんど變動がないという。また同じく後述する文協の「保障作家稿費版權版稅意見書」は、開戦前の植字の手間は千字につき六角、いっぽう稿料は千字につき最低三元であつたと記す。開戦後二年數ヵ月のうちに、植字賃は七、八倍にあり、稿料は据置きなしい減少していることになる)。

作家への報酬の増額、いわば待遇改善による生活保障の運動となれば、運動の主たる對象は稿料を支拂うがわの出版社や新聞社になる。孔羅荪もまた「提高稿費運動」(『抗戰文藝』

第五卷第四・五期)の中で稿料増額運動の必要を説くが、その意義を、作家の生活改善にとどめず、さらに、作家が文學活動の領域と生活の範圍を擴大して「生活實踐」の活動を行い、休息、研究、學習の機會を得られるようにすることに求めている。かれは運動の範圍を文藝作家以外の文筆家にまで擴大した共同行動を呼びかけ、

一、文協が稿料増額運動を發起して宣言を發し、文藝界以外の分野を含むあらゆる文筆家の署名運動を行なうこと。

二、政府當局および文化宣傳機關に對し、この運動に實際的な援助を與えるよう要求すること。

三、稿料の最低額を定めて、出版家に必ず履行するよう要求すること。

の三點を提唱した。かれの主張は姚の主張を補足し、具體的運動方法を示したものといつてよい。運動の範圍を文筆活動の全領域にひろげること、より大きな社會性をもたせようとし、行政當局に關與させることによって、より確實な効果ををはかろうとする案である。

だが孔は他に「保障作家與憲政運動」(『抗戰文藝』第五卷第二・三期)と「再論保障作家生活」(同誌第六卷第一期)を書いて、運動のもうひとつの視點を提起している。すなわち、作

家の生活保障の問題の中で、何より肝腎なのは、實は公民權保障の問題だと説くのである。五五憲章や抗戰建國綱領には「人民は言論著作および出版の自由を有し、法によらないかぎりこれを制限してはならない」とか、「抗戰期間中、三民主義の最高原則、および法令の範圍において、言論出版集會結社に關しては合法的かつ十分な保障を與えるものとする」と記されており、言論の自由こそは民主國家の公民の權利であり、國家が民族の文化を發展させるための最低の原則である。「したがって、今日提起されている作家の生活保障の何よりも基本的な意味は、必然的に文化の民主の保障と密接につながってくる。なぜなら作家が人類の精神領域の指導者となり、民族文化の創造者となるには、文化運動の民主性を保障する基盤の上で、言論出版が合理的に行なわれて、はじめて發展進歩が可能なのであり、作家を民族精神の眞の技師となしうるからである。また、このような基盤の上ではじめて作家の生活保障の意味は眞に達成されるのである」と孔はいう。

作家が求めているものが収入増ばかりでなく、より大きくは自由であり、民主的環境の中で民族文化の創造に参畫することであるという孔羅荪の主張は、誰に對する要求と明記す

るまでもなく、國民政府に對する要求であり、きびしい出版言論統制への抗議である。國民政府の反共政策はたえず強化され、「新華日報」停刊命令（一九三八年七月）、「異黨活動防止辦法」等の反共立法（三十九年二月）、國府軍による八路軍新四軍攻撃（三十九年四月以降）、八路軍新四軍への軍費支拂い停止（四〇年一月）を経て皖南事件（四一年一月）へと連なつてゆく。國民黨中央圖書雜誌審查委員會が自ら發行した『取締書刊一覽』によれば、一九三八年一月から四一年六月までの間に發禁處分となつた書籍雜誌は九六一種に及ぶ。かくも嚴しい言論出版規制、反共特務政治のもとで、多くの作家は息苦しい思いをしているのであり、孔の發言はこれらの鬱屈の表現といえよう。なお孔羅荪は共產黨がわに立つ人である。

だが自由の要求は切實な精神的要求ではあつても、収入増による生活防衛には直結しない。これがどれだけ文筆家の力を結集しうるか疑問である。また、直截に政策變更を迫るような要求を掲げたのでは、運動が著しく政治色を帯びてしまつて、運動への政府の支持どころか干渉を強める結果になり、異つた黨派的立場を含んで成立っている文協の組織そのものの存立が危くなる。まして文協は張道藩ら國民黨高級幹

抗日戦期の作家生活保障運動（杉本）

部を理事に含み、活動經費の多くを政府補助金に依存しているのである。⁽⁸⁾主導権をもたないことで、國民黨がわはたださえ面白くないのであるから、直接的な生活保障の成果を期するなら、政府を刺激することは極力避けなくてはならなかつた。孔が主張した公民權保障の側面は、文協全體の要求としては強調されなかつたようである。後述する四二年末に文協が發した意見書も、この側面には觸れていない。

『新蜀報』の「蜀道」は姚蓬子が編集を擔當していた文藝副刊である。その「蜀道」で四〇年一月二七日に座談會を催し、文協メンバーの老舍、陽翰笙、葛一虹、孔羅荪、王亞平、陳紀澄、胡風等二十六人が出席して、稿料引上げ、印稅保障等の問題について意見を交換した。その記録は未見であるが、『新蜀報』に掲載されて後、重慶の新聞がまづ先に共感を示し、『新華日報』『大公報』『新民報』『中央日報』等がいずれも運動を支持する記事を載せた。⁽⁹⁾『抗戰文藝』第五卷第六期の「文藝簡報」によれば、老舍が『大公報』に書いた「星期專論」の一文は、中でもひろく各方面の注意を喚起したというが、その内容はまだ讀む機會を得ないでいる。同「簡報」は、政府文化當局がこの運動にはなほ同情的で、目下具體的な方策を検討中であると傳え、また作家のがわの

共通意見として、消極的には稿料引上げ、著作権および印税の保障を獲得すること、作家への貸與および救援の基金を設立することを希望し、積極的には出版法に作家の權益保障の部分を追加することを希望していると傳えている。

著作権や印税の保障は一に出版家の道義にかかることであり、從來尊重されなかったからこそ今回の保障運動が叫ばれているのであるから（すでに一九二八年に著作権法が制定され、法的には著作権は保護されていることになっている）、いま出版家に義務を果たさせるには、精神運動だけでは力をもたず、行政の強い後押しが必要であつたろう（ただし、行政が誠實に役割りをつとめるとして）。貸與金や救援金も政府の補助がなければ基金は成立つまい。これらの希望の實現には、したがって行政の支援が不可欠になる。まして出版法（一九三〇年制定、三七年修正）を改めるとなると、いよいよ政府が動かなくてはならない。こうした文藝界の希望を受けて、文化當局はどのような具體策を「目下検討中」であつたのか、記事の限りでは知るべくもないが、少くとも公民權保障の側面に考慮はなく、この面では事態は逆の方向に進んだ。文協の訴えはひろく世論の支持を得たが、運動を具體化し實効をあげることが、實は難題なのである。文協では理事會

で王平陵、姚蓬子、陽翰笙、孫師毅、老舍の五人を選び、この問題を擔當させることにした。この五人による作業の経過とおさめた成果についても筆者は知り得ないでいる。ただ、四十年五月までの間に、國民政府社會部と關連機關との協力で「文藝作家奨助金保管委員會」が設立され（委員は郭沫若、張道藩、老舍、華林、姚蓬子、王平陵、胡風、李抱忱、程滄波、王芸生、林風眠の十一人。吳雲峰が事務局をつとめた）、文協機關誌『抗戰文藝』に稿料の三分の二が補助されることになり、それまで無料だった同誌の稿料が曲りなりにも拂えるようになったことは、ひとつの收穫に數えられるであらう。だがそれ以外に國民黨政府當局は何をしたのであろうか。行政の實際的支援とは、何よりもまず政府直營あるいは半官半民の新聞雜誌が要請に應じて範を示すことでなくてはならない。財と權で優越するそれら企業が應じなくて、運動の實りは期すべくもない。國民黨中央圖書雜誌審查委員會を作つて、それまで國民黨中央宣傳部と國民政府內政部で行なつてきた檢閲を強化したのは一九三八年一〇月であつたが、四一年には「戰時圖書雜誌原稿審查辦法」を制定し、四一年一月の皖南事件以後にはさらに統制を強めて、「雜誌送審須知」（四一年）、「圖書送審須知」（四二年）以下の諸法規

を制定してゆく。四二年にはさらに中央出版事業管理委員會を設置し、「書店印刷店管理規則」を公布している。これら諸法規は作家の仕事、出版事業を取締ることのみを事とし、作家の權益の保護、出版事業の助成については何らの配慮もなされていない。すなわち行政は文協の運動を支援するために「具體的方策を検討する」よりも、統制を強めることに熱心だったのであり、行政の支援による成果は望むべくもなかったのである。

文協理事會は一九四二年一〇月末に到って「保障作家稿費版權版稅意見書」を採擇して、出版家に協議を呼びかけ、新聞雜誌各誌の協力を要請した。運動を始めて三年近く、この間に植字工賃は千四〇〇六〇元に達し、いっぽう稿料の相場は千三〇〇元に届いていなかった。「意見書」は三章から成り、第一の「緣起」の章では「今日の出版事業經營者の苦勞が作家のそれに劣るものではないことを十分承知しているがゆえに、作家の合法的權益の保障問題を提起したについては、決して出版家と對立しようとするものではなく、妥當な原則と出版家の協力によって、合理的な結果を得たいと望むにすぎない」と述べて、出版家がわの苦境への理解を示し、同じ文化事業にたずさわる者同士の協力による解決を呼

びかけている。第二の「辦法」の章は甲、稿料に關する項、乙、印稅に關する項から成り、それぞれの項で支拂い金額や比率、期日を具體的に示したほか、物價スライド制の導入、著作權保護の措置を盛込んでゐる。だがこうした要望も出版家がわのどれだけの部分に受入れられたか疑問である。たとえば四三年三月に開催した文協結成五周年紀念の集會で、勝手に作品集を編み無斷で出版することを取締るよう決議していることから、作家の權益を無視した出版がなお横行していることが推察されるのである。

「緣起」にはまた「圖書雜誌の出版と地方への販賣の不便を緩和するため、政府機關に對し、出版物の檢閲と發送の困難を極力減らしてくれるよう懇請した」と述べて、出版界の共同歩調を呼びかけた部分がある。出版物の思想内容は別として、單に事務手續きに限って見ても、檢閲をはじめ諸法規と各機關による幾重にも重なった關門は、時間と勞力を甚だしく浪費させ、多くの作品を無駄にした。これは作家と出版家に共通の災厄であり、まさしく共闘の材料であるべきであった。もちろんこの懇請も手續きの緩和を求めるに止まるのであって、表立って思想的自由の擴大を求めうる時代ではなかった。

四

ところで、作家の生活と權益を保障する運動を推進するに當つて、文協には些か自家撞着する問題があった。作家と出版家の兩者の立場を一身で兼ねる會員が多かつたのである。出版社に雇われて働くにせよ、新聞の文藝副刊を編集するにせよ、あるいは自ら事業者となつて雑誌を出すにせよ、作るのがわの立場からすれば原價を極力節減しなければならず、そのためには世間の通例に従つて稿料を低く押さえなくてはならない。書き手としては勞苦にふさわしい報酬を要求したいが、稿料が低く押さえられれば、生活の資はいきおい作るがわの仕事に求めなければならず、その仕事に比重をかければ、稿料はいよいよ低水準を維持せざるを得ない。インフレの時期に事業の持續を優先すれば、作るがわの立場を貫かざるを得ない。そういう實情があるかぎり、文協の運動も足もとに大きな穴があいていくことになる。それはまず先に解決すべき事からであり、だからこそ頭初から「稿料引上げについて、われわれは會員が編集主任をつとめる雑誌でまず實行するよう主張」⁽¹²⁾したのである。運動開始から三年近く経つてこういう「意見書」が生まれたということは、その間

さまざまな試行錯誤がありさまざまな個別交渉の例があつて、それがひとつの案に統合されたのであらうが、總じていえば運動の成果が乏しかつたことの傍證であらうし、運動の足を引っぱつた要因のひとつに前記の事情があつたことは確かである。そして「意見書」もまた會員が主宰する雑誌や出版社でまず實行することを求めている。換言すれば、それまで會員でありながら實行しないで、あるいは實行できないできた者が多いということにほかならない。會員自らが實行できないのでは、會員外の出版家に對して説得力を缺くのは當然である。

肝腎の文協の機關誌『抗戰文藝』は、どれほど稿料を拂つていたのであらうか。『抗戰文藝』は武漢時代で每號七、八千部、重慶移轉後は每號五千部刷つていたが、三八年五月の創刊以來、第六卷第二期（四〇年五月一日刊）⁽¹³⁾に到るまで稿料は無料であつた。例外として文筆一本の生活をしている作家に對してのみ、紙筆墨代として微々たる額を渡していた。第六卷第三期（四〇年二月一日刊）に到つて、文藝奨助金保管委員會から稿料の三分の二の補助を得ることになり、はじめ、千字六―一二元の稿料を寄稿者全員に支拂うことに決めた。（この基準に照らして考えるとき、第六卷第四期に掲載

の魯迅夫人許景宋の寄稿「民元前的魯迅先生」に對して、理事會で千字二百元を支拂うように決めたことが、いかに破格の扱いであるかがわかる。この水準は第七卷第六期（四二年六月二五日刊）まで維持され、第八卷第一期からは二〇〇三元に増額されたが、インフレの進行はこうした金額の豫示を不可能にし、第九卷に入ると雑誌の投稿規定にただ「文協の規定に従つて支拂う」とのみ記すに到つた。一九四四年一月には千字三百元に決めている。ついでに誌代の推移を見ておくと、

第一卷第五期（三八年五月二日）、一六ページ、五分。

第六卷第二期（四〇年五月一日）、八四ページ、六角。

第七卷第四・五期（四一年三月二〇日）、一三二ページ、二元二角。

第八卷第四期（四三年五月一日）、七六ページ、九元。

第九卷第一・二期（四四年二月一日）、一五二ページ、三八元。

同第五・六期（四四年十二月）、一三八ページ、一二〇元。

第一〇卷第二・三期（四五年六月）、一一六ページ、三五〇元。

となつてゐる。原稿千字の報酬で、この雑誌が何冊買えたであろうか。

五

稿料引上げ、權益保護と並んで、困窮作家への救援もまた文協が力を注いだ運動であり、これは抗戦後期にとくに目立つ。すでに四三年三月の五周年記念の大會で困窮作家の救援を決議しているのであるが、特にひろく社會に呼びかけて、大がかりな貧病作家救援基金募集運動を展開したのは、一九四四年七月から一二月のことであつた。直接の動機は、一部の作家が病氣に倒れても治療を受けられず、飢餓に苦しんでも助けを得られず、死んでも葬儀を出せないという悲惨な事實があつたからであるが、文協は運動の開始を正式に決定したとき、この運動を通じて文藝工作者と社會の人びととの連帶を計測し、かつ強化しようと願つた。そしてこの意圖の正しさを證明するかのように社會の廣範圍にわたる人びとから、さまざまな方法を通じて、豫想をはるかに上回る支援と協力があつて、運動は大きな成果をあげた。この年はおりから日本軍の大陸打通作戦の展開によつて桂林、柳州も陥落した。中でも桂林はそれまで戦火から比較的遠く、平穩な時期が続いて、抗日戦期の文化活動の一大中心地となつており、多くの作家が移住してきて文協の分會活動も活潑であつた。それだ

けに突然の陥落によって多數の作家が生活の場を失い、流浪の日々に追いこまれたから、緊急の援助が必要であった。文協はこの時の救援募金によって、かれらの救援に即刻對應することができたのである。

文協の訴えにこたえて協力の手をさしのべたのは、「民族解放闘争に獻身してきた老大家、同盟國の友人、誠意あふれる兒童、勤勉なる教師、先進的な労働者、世論の魂たる新聞記者、戦場行きを控えた忠勇なる將兵、空軍要員、清貧に生きる公務員、従業員、廣範な年若い文藝愛好家……、作家と志を同じくする美術家、音楽家、科學者、戲劇工作者」〔爲宣佈結束募集援助貧病作家基金運動公啓⁽¹⁴⁾〕であり、協力の方式は、あるいは文章を書き、あるいは壁新聞、雑誌を出し、あるいは講演會、座談會を催して支持を訴え、あるいは音楽會、展覽會、バザー、演劇公演を催して基金を集める、等であった。個人からの寄附金は「あるいは節約により、あるいは物を賣り、あるいは食を減らして得た金であり、あるいは食を抜いて工面した金でさえあった」〔同「公啓」〕。

この時の義捐活動のうち、大規模なものは次のような例にその一端を見ることができる。

孫夫人（宋慶齡）は貧病作家救援のためのダンスパーティ

を催して、二夜で七〇餘萬元を集めた。⁽¹⁵⁾

文協成都分會では女流畫家作品展、音楽會、演劇公演、繪畫バザー等を催して百萬元を得た。⁽¹⁶⁾

バイオリニスト馬思聰は昆明で三日間演奏會を開き、収入をすべて文協總會に手渡した。⁽¹⁷⁾

……

これらの収入に加えて、無數の民衆から寄せられた淨財が基金をふくらませた。趙景深によれば、困窮作家救援のための募金は五、六〇〇萬元にのぼったという。⁽¹⁸⁾この金額は抗戰期全體を通じてのものか、四四年後半の運動に限定してのものか、また募金總額をいうのか救援に支出した額をいうのか、さだかでない。だが、インフレによる貨幣價値の激減を勘定に入れても相定額である。こうして集められた基金は文協總會受領のものも分會受領のものも、一律に基金管理委員會の手で管理され、基金の配分と運用は、文協理事會が大綱を決めたあと委員會が執行した。管理委員は先に老舍、孫伏園、華林的三人が選ばれ、後に茅盾、胡風、姚蓬子、梅林、葉以群、王平陵の六人が加わり、さらにその後馮乃超が加わった。⁽¹⁹⁾運動は四四年一二月末で一應の區切りをつけたのであるが、この段階で基金總額の約三分の一が救援に支出されてい

た。その対象は桂林、柳州から脱出のあと無一物で重慶にたどりついた作家、旅費もないままなお貴陽、遵義一帯を流浪している作家や劇團、貧窮と病苦にあえぐ作家、物故作家の遺族等であり、支出例は部分的には『抗戦文藝』『時與潮文藝』等の誌上で報告されている。残餘の基金はひきつづき救援にまわすほか、文協による文藝事業のための経費として積立てられた。運動の区切りにともない、收支の總決算、救援を受けた作家のリストと金額の明細を、總會と各分會それぞれに新聞紙上等で報告しているはずであるが、筆者はまだ読む機会を得ていない。

廣範な人びとの力強い支援に、文協は團體としても作家個々人の立場からも、慰めと勵ましを得たばかりでなく、それにもまして強い鞭撻と自らの責任の重さを痛感した(同「公啓」)。戦争の被害者はおびただしい數にのぼる。占領を拒否して異郷をさすらう人、家を焼かれ肉親を殺され、一家の支柱を失って路頭に迷う人、飢餓と病氣に生命を落とした人々の數は知れない。それらの人びとは支援も得られず、自らを組織することもなく、自らの苦しみを訴える力もなかった。作家は文協という組織をもち、文筆を武器とする戦士であったがゆえに、社會に苦境を訴えて支援を得ることができた。

抗日戦期の作家生活保障運動(杉本)

そして作家を支援した人の多くは、同じく苦境にありながら訴えるすべをもたない人であった。救援基金によって何人の作家や家族が救われたかは詳かでない。また、貧しい人びとの寄附は募金總額の少部分にすぎなかったかもしれない。だが大切なのは、そうした數字ではなく、民衆的ひろがりをもって救援が行なわれたという事實である。運動への支援を作家の困窮への單なる同情と見るのは甚だしい誤りである。文藝界の活動が人びとの心をとらえ、人びとに評價されたからこそ、廣範圏にわたる支援が得られたのであり、それは抗日戦という民族の大事業に投じた有名無名の文藝戦士が、あるいは乏しい中から幾度か「出錢勞軍運動」を行い、あるいは前線兵士のために通俗讀物を作り、あるいは民衆のための文藝講座を開くといった具體的な奉仕活動を含めて、前線と後方での文藝活動を通じ、作品を通じてより廣く民衆の心とながり、文藝界がより深く民族の命運にかかわり、より大きく社會的役割りを有したことへの人びとの支持の現れなのである。

注

(1) 陳紀澄『胡政之與大公報』(掌故月刊社、一九七四年刊)二四六、二五九ページ。

中國文學研究 第七期

- (2) 國民政府主計處統計局の材料により作製したものという。
表二についても同じ。
- (3) 原材料は主に國民政府經濟部統計室編の統計によるという。
(經濟部統計局と主計處統計局との關係については未確認)。
- (4) 原材料は中國農民銀行經濟研究處編『中國各重要城市零售物價指數專刊』によるという。
- (5) 岩松久雄氏「葉紫研究資料目錄(2)」(『龍溪』第五三號。一九七九年一月)に引く莫洛「葉紫」による。
- (6) 『抗戰文藝』第六卷第一期(一九四〇年三月三〇日刊)の「文藝簡報」による。
- (7) 張靜廬編『中國現代出版史料』丙編。一七三—一三八ページ。
- (8) 筆者は本誌第五期掲載の「文協と老舍に關するノート」の中で、政府補助金がまったく空手形に終ったかの如くに述べたのであるが、これは訂正しなくてはならない。文協の會務報告から見るかぎり、少くとも抗戰前期においては、期日は守られなかったとはいえ、補助金は支給されており、文協の収入の最大比率を占めていたのが實情のようである。
- (9) 座談會については『文學月報』第一卷第二期(一九四〇年二月刊)一一三ページの「文壇備忘錄」および『重慶師範學院學報』一九八一年第三期所收の中文系國統區抗戰文藝研究室編「抗日戰爭時期國統區文藝大事記」(續)による。反應については同「大事記」による。ただし『中央日報』の名は
- 『抗戰文藝』第五卷第六期一四一ページの「文藝簡報」によって加えた。
- (10) 『抗戰文藝』第六卷第二期一五〇ページの「文藝簡報」による。
- (11) 同右第八卷第四期六五ページの「會訊」による。
- (12) 『文藝陣地』第四卷第七期一四四一ページに掲載の姚蓬子の手紙による。
- (13) 老舍「八方風雨」のうち「抗戰文藝」の項による。
- (14) 『抗戰文藝』第十卷第二・三期に掲載。
- (15) 『時與潮文藝』第四卷第二期に掲載の錢新哲編「藝文情報」による。
- (16) (17) 同右第四卷第五期の「藝文情報」による。
- (18) 趙景深『文壇憶舊』一五八ページ。上海北新書局、一九四八年刊。
- (19) 『時與潮文藝』第四卷第三期および第五期の「藝文情報」による。